

鈴木有郷牧師 説教

2/14/10 「イエスと子供達」 マルコ10:13-15

主イエスは、子供達を抱き上げ、彼らを祝福されたこと福音書は記しています。現代の私達の間からは、大人が子供を可愛がるのはごく当然なことで、イエスの行為に特別な意味があるとは思えません。

それでは、何故福音書は、主イエスの子供達への優しい態度を特別に重要なこととして記しているのでしょうか。今朝読んでいただいたマルコによる福音書の記事の中に、この問いへの答えを見つけることができます。

ある日、主イエスに祝福してもらおうと、人々が幼い子供達を連れて来ます。子供達は主イエスに走りよります。それを見てイエスの弟子達は大人達を叱ります。私達の先生に失礼ではないか、と言うのです。

すると、主イエスはこの弟子達の態度を憤り、子供達を抱き上げて言われます。「子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」

このエピソードから、私達は何を読み取るべきでしょうか。

聖書の時代において、一人前の人間とは家族を養う家長としての男性を意味していました。つまり当時の人々が人間をイメージする時、それは男の人、それも家族持ちの男性のことで、男性より劣る存在と見なされていたのです。

このような社会において、幼い子供は大人になるまで、厄介者だったのです。

この点を念頭に置くと、何故、子供達が主イエスに走りよるのを見て、弟子達が叱ったのかが分かってきます。弟子達にとって、主イエスは、厄介者の子供などが馴れ馴れしく走りよれるような存在ではなかったのです。そうではなく、恐れ多い、遙か彼方に奉るべき遠いお方だったのです。

つまり、弟子達はイエスと文字通り寝食を共にしながら、その存在意義をまったく理解していなかったということになります。イエスが憤られた理由がここにあります。

主イエスは言われます。「子供達を妨げてはならない。神の国は自分に走りよってくるこれらの子供のような者たちのものだから。」

この場合の「神の国」とは何を意味しているのでしょうか。主イエスはたびたび神の国を、身分の異なった人々が和気あいあいと食事を分かち合っている姿に例えられました。男も女も、収税人も罪の女も、ユダヤ人も被差別部落に住むサマリア人も、健康な者も病にかかっている人も、そして厄介者と見なされている子供達も、皆共にイエスの食卓を囲んで食事をする姿、そこに神の国をイメージしておられます。

つまり神の国において、上の人も下の人もないのです。偉い人、偉くない人の区別は存在しません。民族や人種の壁は切り崩され、すべてが神にこよなく愛されている者としてお互いに食べ物を分かち合うのです。

この共有と共存、和解と連帯のイメージこそ、主イエスが身を以て示された神の思いに適った人間とその共同体の姿だったのです。社会に無視され、孤独をかこっていた人々が主イエスを慕い、彼の行く所、行く所で彼を取り囲んで離さなかった理由がここにあります。

ですから、主イエスが子供達を祝福されたのは、彼らが可愛かったからという単純な理由からではありませんでした。子供達を抱き上げ、祝福されたのは、社会には厄介者として扱われている彼ら一人一人が神の目にこの上なく貴重で、この上なく重い、誰も代わりをつとめることのできないユニークな人格であることを示したかったからです。

このエピソードは私達に一つの問いを投げかけます。私達は子供達を叱る弟子達の側にいるのでしょうか。それとも主イエスに走りよる子供の側にいるのでしょうか。主イエスを遠く、偉い存在として奉ることに力を注ぐのでしょうか。それとも主イエスを私達と同じ地面に立つ、最も身近な存在として無限の信頼を寄せるのでしょうか。

主に向かって駆け寄るなら、イエスは私達を、大手を広げて迎えてくださるに違いありません。主イエスは私達を固く抱きしめて、手放れることはないのです。イエスこそ我が砦、我が櫓、我が岩です。